

ファイアーエムブレム  
風花雪月 灰色の悪魔と  
邪龍の半身

鴉になりたい玉ねぎ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

イーリスで起きた決戦

青年は自身を犠牲に邪龍を滅ぼす決断をする

その決断が彼をある世界へと導く

そこで彼は再び自らの軍師としての力を振るうことになる。

個性的な生徒達と関わり日々を過ごす中彼は再び選択を強いられる。

彼が選ぶのは“革命”か“敵対”かあるいは第3の選択肢か…

注意!!

この作品ではFE覚醒のネタバレがあります。

またオリジナル展開、原作キャラ生存、独自解釈などが含まれます。  
作者は風花雪月をクリアしていないにわか知識で執筆しています。

# 目次

今作のキャラ紹介、設定	1
プロローグ	5
第1話 夜明けとの出会い（前編）	9
夜明けとの出会い（後編）	13

# 今作のキャラ紹介、設定

今作の主人公達

・ルフレ

今作の主人公の1人。見た目はスマブラのルフレの初期衣装。

イギリスでは全てのジョブをカンストさせた猛者で本来はカンスト性能で転移する予定だったが急遽弱体化することに。ちなみに料理、炊事など一通りできるが料理は食べた人間曰く鋼の味がすると言われた。

・ベレス

ルフレと同じく主人公の1人

戦闘においては強いがほかは普通、料理が苦手。基本剣だが必要に応じて魔法を使う予定のキャラ。

ヒロインにしようか悩んでいる。

他の主要キャラ

・ジエラルド

壊刃と呼ばれた元騎士の傭兵、強さはカンストルフレと同程度、という設定。かなり

強い

・エーデルガルド

本名エーデルガルド・フォン・フレスベルグ

黒鷲の学級の級長で次期アドラストア帝国皇帝。

ヒロイン予定だがルフレとベレスどちらにしようか迷っている。斧を使うパワーファイター。

過去になにかあったようで闇を抱えてる。作者の推し

・デIMITリ

本名デIMITリ・アレクサンドル・ブレーダット

青獅子の学級の級長。槍を使う。

好印象で爽やかなイケメン。彼もなにか闇を抱えてる。

・クロード

本名クロード・フォン・リーガン

金鹿の学級の級長。弓を使う。

明るくムードメーカーなイケメンやはり彼も過去になにかあったようだ。

個人的に好きなキャラ

・フェルデインント

本名フェルディナント・フォン・エーギル

おそらく風花雪月プレイヤーのほとんどが覚える名前

理由は操作時必ず

「フェルディナント・フォン・エーギル」

と叫ぶため。作者は結構好きなキャラクター槍を使う貴族的なキャラそこそこ優秀でエーデルガルドをライバル視している。

・フェリクス

本名フェリクス・ユーゴ・フラルダリウス

作者と作者の友人はこのキャラをロンクールの意志を継ぐものと呼んでいる（ロンクールとはFE覚醒のキャラでクリティカルの確率が高いキャラクター）

クールなイケメン最終的にクリティカルキャラになる。

強い奴と闘うのが好き。

・リシテア

本名リシテア・フォン・コーデリア

作者の友人の推しキャラ

背が小さく子供扱いされるのが嫌い。甘い物が好き。

魔法特化のキャラだがあるイベントのアイテムがあると高火力の魔法を五マス射程

で放つ砲台と化す。

設定など

・ルフレ

ギムレーを討伐後転移し若返っている

邪龍としての力は極力使われないが使うときは全力で使う

・邪龍のブレス

邪龍時のルフレが使える技のひとつ

自身の体力を削り使用する。威力は高いが連続して使うことは出来ない。

またルフレは感情が高ぶると言動が少し荒くなり口調が変わる。



## プロローグ

ある世界での決戦

「…お前が僕についてことに感謝しているよ。この命をみんなのために使えるんだから。」

空が暗く不気味になっていく中、巨大な龍の背中で青年は目の前にいる自身と同じ姿をした邪龍に語りかける。目の前の存在は聖王の剣でとどめを刺せば長い時間封印することができる

だがそれではいつか未来で目覚めその時代の人々が苦しめられてしまう。

…自分が邪龍にとどめを刺し共に消滅すれば邪龍は二度と復活しない。自分を好きになってくれた恋人のためにも必ずここで滅ぼすべきだろう。

そう考えると青年は最後に自身の恋人の顔を思い浮かべ、手に持った聖なる魔導書を発動し邪龍を滅ぼした。

自身の肉体が消えていく中、彼は仲間達に言った

「……みんな今までありがとう大変だったけど楽しい旅だったよ。」

「クロムもう訓練中に物を壊さないでね。あれ直すの大変なんだから。」

「ああ……これからは気をつける、ルフレみたいに直すやつが居ないと大変だから。」

「壊す前提で言わないでくれよクロム。訓練用とはいえ直すの本当に大変なんだからな  
本当に気をつけてくれ

ちやんとスミアを幸せにしてやれよ。

ルフレデリク、リズこれから大変だと思うけど2人で仲良く頑張つてね。」

「ええ……ルフレさんが居なくなると仕事がさらに増えますからね、早めに戻ってきて  
ください。」

「うっ……うっ……ルフレさん……今までありがとう。」

「うーんどのくらいで戻つてくれるかは分からないけど早めに戻れるよう頑張つてみる  
よ。」

リズこちらこそありがとう君とクロムが見つ付けてくれなかったら僕はここにいな  
かったからね。ルフレデリクと幸せになつてね。」

消えるまでの時間が無くなっていく、まだまだ言いたいことがあるが言えそうにな

い。

彼は最後に自身の最愛の人を見て

「ルキナ：

君を置いていくことになる。

もつと君と過ごしたかったけど出来ないみたいだ

……ごめんね？

泣かないでくれ、ルキナ。前に言っただろう？辛い時や別れる時は笑顔でつて。元気でね。」

「—————」

少女が泣きながらなにかを言い青年を抱きしめる。恋人の腕に抱きしめられながら青年は笑顔を保ち消えていった。

……自分が落ちていく感覚がする。意識が無くなっていく。彼は最後に見た彼女の笑顔を思い浮かべながら彼女の幸せと平和を願って眼を閉じ意識を失った。

とある大陸

??? 「なに？人が倒れてる？

：．  
そいつはどこにいる、案内してくれ。」

??? 「こつちにいたよ父さん。」

## 第1話 夜明けとの出会い（前編）

「――、――、――、――、――」

誰かから呼びかけられている気がする。

「父さんこの人大丈夫かな？」

「この様子だとダメかもしれないな。」

初めて彼らと出会った時を思い出す。その声に答えるために身体を動かそうとする  
と身体の反応が鈍く感じる。とりあえず起きて彼らに礼を言おう。

「どうしよう?..」

「お? 起きたみたいだな。」

お前大丈夫か? こんなところで寝ていると死ぬぞ。」

目の前に槍を持った茶髪の男性と剣を持った深い藍色の髪の少女がいる。  
懐かしい状況に目頭が熱くなるがこらえる。

周りを見るとどこかの森林のようだが見覚えがない、

目の前の人なら知っているだろうか?

「(っ)は(っ)ですか?..」

「ここか？ここはアドラステア帝国の辺境の森だ。

それよりお前大丈夫か？ガキが森に入るのは危ないって親に言われなかったか？」

ガキ？おかしい、背の低いリヒトならともかく180cmくらいあった身長ならばガキと呼ばれないはずだが？

改めて自分の身体を見るとなんと目の前の少女と目線が同じだった。

!?なぜ身体が幼くなっている!?なぜここにいる？など次々と疑問が出てくる。

まず先程言っていたアドラステア帝国？だったか？どここの国だろうか？イーリスにはそんな国は無いはずだ、まさか異界の門をくぐったような状態になっているのだろうか？

「おいお前さん大丈夫か？酷い顔色だぞ？」

その声で自分がパニックになりかけたと気づく

……どこかは分からないが一旦落ち着こう。

「だ、大丈夫です。それより助けていただきありがとうございます。」

あなたがたの名前は？」

「俺はジェラルド傭兵団団長ジェラルドだ

こいつは娘のベレス」

「…」

「礼ならうちの娘に言え、こいつがお前さんを見つけたんだからな。」

「ありがとうベレスちゃん」

ベレスに礼を言うと彼女は頷いた。

感情をあまり表に出さない子なのだろうか？

「そういえばお前さんどこの村に住んでる？」

…… しまったおそらくここはイーリスではない。

ペレジアと答えても意味は無いだろう

…… あの手で行くか、あんまり演技は得意じゃないが。

「すいませんそれが自分がどこの出身か覚えていないみたいです。名前とかは思い出せるのですが。」

「記憶喪失ってやつか？そりゃ随分都合のいい記憶喪失だな。そういえばお前の名前はなんて言うんだ？」

「僕の名前はルフレと言います。」

「それじゃアルフレ、お前さん……」

ジェラルドがなにか言おうとした時、どこからか矢が飛来してきた。矢がジェラルドに当たる時ジェラルドは既にその矢を掴み取っていた。

「ちっ！盗賊か、全く間の悪い時に来やがって。」

そう言うと彼はベレスに

「ベレスお前はルフレと一緒に傭兵団に行け。なにかあつたら剣を使い」と言うところかき走つて行つた。

「君は剣術が使えるの？」

ベレスに聞くと彼女は頷き

「傭兵団の人達と父さんに教えてもらったから使える。」

彼女だけに戦わせる訳には行かない、何かないかと持ち物を探るとファイアーの魔導書を見つけた。

「僕も少しは魔法が使えるから手伝うよ。」

「ありがとう。助かる。」

そういうと彼女は走り出した。

後編に続く…



## 夜明けとの出会い（後編）

しばらく走っていると向こうに野営地が見えてきたがどうやら野営地でも戦闘が起きていますようだ

「私は傭兵団のみんなに加勢に行くけどルフレはどうする？」

「僕も加勢するよ人数は多いほうがいいからね。」

「じゃあ着いてきて。」

そう言うのと彼女は近くの盗賊へ駆け寄り切り捨てた。

「ベレス！無事だったか！」

傭兵団のベレスの知り合いのようだ。よく見ると周りの人たちは盗賊とは違い、服装

に共通点がある。

「私は大丈夫。みんなは？」

「こつちは今のところそこまで被害はない。

ところで後ろにいるやつは誰だ？」

「僕はルフレと言います。」

「また団長が誰か拾ってきたのか。お前戦えるか？」

「魔法と剣を少し使えます。」

「ならベレスと一緒にいた方がいいな。ベレスはとりあえず後ろに下がっていてくれ。もしかしたら何人かそっちに行くかもしれない。」

「わかった。ルフレこっち。」

彼女について行き、テントなどが密集している場所で待機することになった。どうやら非戦闘員がいる場所のようだ。

・・・この辺りの戦闘は収まったようだ

誰かが近づいてくる！いつでも魔法を使えるように構えていると、

「ベレスそっちは大丈夫だったか？」

とジエラルドの声が聞こえてきた

「父さんはどうだった？」

「あんなのに負けるかよ。」

ルフレさっきの話の続きだがウチの傭兵団で働かないか？傭兵なんてやってると人手はいくらあっても足りないからなついでに戦える奴は大歓迎だ。」

「こんな素性のわからない奴でいいんですか？敵かもしれませんよ」

「敵ならそんなことは言わないだろう。それに魔法が使える奴はあまりいなくてな、ちようど良いんだよ。」

「わかりました。それならここで働かせてもらいます。」

「よし！これからお前にはウチで働いてもらうぞ！じゃあ今夜お前をみんなに紹介するか！」

「きょうからよろしく願います。団長」

「ルフレ、これからよろしく」

「ベレスもこれからよろしく」

…久しぶりにこの世界に来た時の夢を見た。

「懐かしいな今の夢、もう10年前になるのか。」

いつもの服に着替えながら呟く。傭兵団での生活は自警団の頃を思い出す生活だった。

「今日は何の仕事をするんだろう？団長に聞きに行くか。」

団長のところへ行く途中で今日は何をするのか考える

（戦闘かな？子供たちの剣の練習相手？それとも魔法の練習相手？もしかしたら家事かもしれないなあ。）

そんなことを考えていると団長のところに着いた。

「おはようございます。団長」

「ああルフレか、おはよう」

「団長今日の仕事は何ですか？」

「そのことなんだが、今日は特に仕事もない。たまにはゆっくり過ごしてくれ。」

「仕事がないなんて珍しいですね」

「たまにはない日もありだろう。」

「そうですね。では失礼します。」

「そっか今日は休みなのか：何しよう釣りでもしようかな？」

そうして時間を潰しているのと夕方になって来た。

（最近夕方でも暗くなってきたな早めに帰ろう。）

傭兵団に帰ると見慣れない服を着た三人組が団長と話しているのを見つけた。

（厄介ごとの予感がするなあ。）

そう思いながら彼らに近づいていった